

# 藤女子大学 図書館 だより



Fuji Women's  
University  
Library

秋号

No.98  
2019.10



1. 図書館(室)とのかかわり  
……… 保育学科 駒形 武志
4. 教員著作紹介
5. 本を読みとくことの大切さ  
～ポップ作りの活動を通して～  
人間生活学科 伊井 義人
6. 第4回 学生選書ツアー開催
7. LiSt活動報告 第5回
8. 図書館資料Navi 第14回  
「令和」にことよせて一年号と出典をめくって  
… 日本語・日本文学科 水口 幹記

CONTENTS



## 図書館(室)とのかかわり

保育学科 駒形 武志

原稿の依頼を受け、図書館(室)とのかかわりについて考えてみることにした。思い出話が多く申し訳ないが、ご自分の図書館(室)とのかかわりを思い浮かべながら読んでいただけるとありがたい。

小学6年生の時の担任W先生は、国語の時間を使って1週間に1度、必ず図書室へ私たちを連れて行ってくださった。その小学校の図書室は、木造2階建コの字型校舎の1階にあり、窓からはきれいに剪定された庭木や、鯉を飼っていた池のある中庭が見えた。また、図書室は普通教室から少し離れた場所にあったので、そこまでは子どもたちの賑やかな声は聞こえてこなかった。本を読むのには最高の場所であった。

図書室に入ると、W先生は私たちに「好きな本を読んでいいよ」とおっしゃり、ご自分も本を読みだ

す。私たちは本棚のある場所へ行き、好きな本を選ぶ。本が決まると班ごとに決められた場所に座り、本を読むことに集中していく。5分もすると静かにページをめくる音だけが聞こえてくる。時間はゆっくりと流れていた。

あの頃の私が好んで読んでいた本は、小学生向け歴史人物伝であった。記憶は曖昧だが、新しく購入されたシリーズ物の本で、全20巻ほどであったと思う。聖徳太子から始まり、奈良、平安、室町、戦国、江戸、明治、と歴史の流れに沿ってそれぞれの時代を代表する偉人たちの生い立ちや、業績が記された伝記ものであった。本から得た知識は、その後、子どもたちに歴史上の人物のエピソードを話すのに大いに役に立った。W先生のおかげで、歴史人物伝は小学校の卒業までに、第1巻から最

終巻まで読み通すことができた。今考えるとW先生のように国語の時間を使って「読書」を、それも通年で行うということはかなり難しいことだと思う。今の小学校の先生なら、やりたくても許されないことだろう。当時の私たちは恵まれていたのかもしれない。

大学の教員になる前、私は小学校の教員をしていた。着任した8つの小学校で子どもたちと楽しく勉強したり、遊んだりしてきた。その関係で図書館（室）とのかかわりも数多く体験してきた。しかし、学校以外の方が聞くと、かなりユニークな体験が多いかもしれない。

3つ目の着任校でのことである。当時はまだ一校に一つずつプールがなかったこともあり、水泳学習は、隣の小学校のプールを借りて行っていた。プールまでの交通手段は、当然、徒歩である。隣の学校と言っても距離的には片道3kmはある。小学生の足では、往復すると1時間近くかかる。低学年の子にとってはかなりのハードワークである。午前中にプールへ出かけると、給食を食べてからの時間は、勉強どころではなくなってくる。ある先輩の先生が「そんな時は図書室へ連れて行って本を読ませるといいですよ」と教えてくださった。私もそうしてみることにした。子どもたちを連れて図書室へ行き、好きな本を選ばせ、読書の時間にしたのである。絨毯敷きの図書室であったこともあり、子どもたちは各々がくつろいだ姿勢で本を読みだした。すると、プールの疲れもあったのか10分も経たないうちに、クラスのほとんどの子どもたちがスースーと寝息を立てて寝てしまった。本を読みながら眠りに入る。まさに至福の時間を過ごしている子どもたちの寝顔を見ると、もう少し寝かせてあげようという気持ちになった。

学校図書館地域開放事業（開放図書館）というものがある。札幌市にはある。札幌市立の小学校等の学校図書館を児童生徒の他、地域住民にも開放してサービスを提供する事業である。子ども及び地域の読書活動を盛んにし、読書を通じて子どもと大人、大人相互の交流の場を広げ、地域社会の教育力の向上に役立てることなどを目的としている。運営はPTA役員、教職員、ボランティア、地域の代表者などで構成する運営委員会が行い、日常活動は地域ボランティアが担う。本の貸出や選定、図書館内の装飾のほか、読み聞かせや人形劇、大型紙芝居な

どの上演、読書会、親子で参加できる工作会など各種行事を行うようになる。

私も開放図書館の活動には随分かかわってきた。7校目に着任した学校では、大型紙芝居で『じごくのそうべえ』（たじま ゆきひこ作）の読み聞かせを行ったことがあった。



『じごくのそうべえ：桂米朝・上方落語・地獄八景より』  
請求記号：376.19 / Ta 26（両館所蔵）

スタッフは、司書さん、用務員さん、先生方、PTAの役員の方などである。お互いのスケジュールを調整して練習に励んだ。

紙芝居は畳一枚分の大きさのパネルが2枚で一枚の絵になるように作られていた。制作は開放図書館のボランティアの方が何か月もかかって丁寧に仕上げた。一枚一枚の絵はステージの上で巧みに組み合わせられ、迫力満点の動きを観客に見せる。絵の動きそのものが演技になっているのである。私たち声優は暗幕の後ろに控え、会場に響くように声を張る。声優の難しさは、声だけで表現しなければならないということにある。感情の起伏の激しい台詞は比較的やりやすい。しかし、感情を抑えた淡々とした台詞は実に難しい。声を落とし過ぎると観客には届かない。かといって大きな声で読んでしまうと、状況やその時の心情が伝わらない。演出になったお母さんからは、その都度厳しいダメ出しがでる。先生たちは確かに読み方が上手である。声も大きい。しかし、手を抜こうものなら、先生であろうとも全く容

赦ない。おかげさまで、私も、読み聞かせに磨きがかかり、今まで以上に興味を感じるようになった。『じごくのそうべえ』の公演は、地域の文化祭や、ブックフェアでも公開することになった。東日本大震災の折、札幌市へ一時避難してきた子どもたちのために公演を行ったこともあった。

この事業が学校にあることによって、学校の図書室は図書館へと変身するようだ。これまでの学校の図書室は、本を置いておく書庫としての役割か、図書委員がいて中休みや放課後などに本を貸し出す程度であった。本棚の本は整理されずに置かれていたり、ひどい時には、物置代わりに使われたりすることもあった。ところが、司書さんが着任し、ボランティアのお母さん方が活動するようになると、図書室の環境は一変する。落ち着いて本を読む場所、図鑑や関係する本を使って調べ学習をする場所、そしてなにより、子どもたちにとってよい本を紹介してくれる場所へと変わっていくのである。

2年生のこくご下で扱われる『お手紙』（アーノルド＝ローベル作）という教材がある。登場人物のがまくんとかえるくんの友情を扱った心温まる物語である。物語は、かえるくんが書いたお手紙を、カタツムリくんに託したことで、お手紙を待つ間の幸せな時間が2倍にも3倍にもなるというストーリーになっている。ところが、クライマックスにたどり着くまでの二人の関係は、教科書の文章を読んだだけでは不十分なのである。どうして、かえるくんはがまくんにあんなすてきな手紙を書くことができたのか。二人のこれまでの関係が抜けているために、根幹にかかわる部分が理解しにくく、味わえないのである。

この作品はシリーズ物であり『お手紙』の前段になる部分では、二人の性格や行動にかかわることが描かれている。そこにふれることによって、かえるくんの優しさや親切な行動の源が分かってくる。その辺りを深めていくために、私は、子どもたちに発展読書として教科書に出ている『お手紙』の前後を読んでもほしいと思っていた。そんなお話を司書さんにすると、ある日、突然、図書館の一角に『お手紙』のコーナーが作られた。同じように『ごんぎつね』や『大造じいさんとがん』、『やまなし』のコーナーも現れた。どれも教科書の教材である。子どもたちは、

自分の興味関心だけでは読書の幅を広げにくいものである。そこにさりげなくかかわってもらうことによって、子どもたちの読書の幅は限りなく広がっていく。

ふだんあまり発表のない子どもが、突然私のところへやってきて、こんなことを言ったことがあった。「先生、どうしてかえるくんががまくんに親切なのかわかったよ。だって、かえるくんが病気の時に、がまくんはやさしくお話をしてくれたんだよ。証拠もあるよ。」彼は得意そうに『ふたりはともだち』の本を見せてくれた。



『ふたりはともだち』

請求記号：A933.5 / L 77 (花川館所蔵)

こうして振り返ってみると、私の図書館（室）とのかかわりは、多くが小学校という狭い範囲でしかなかったようだ。しかし、大学に来て3年が経ち、藤の図書館は、私に、新たなかかわりをもたらしている。コンピュータの検索機能を使えば、読みたい本は即座に手に入る。貴重な資料などは取り寄せてもくれる。3階の迷路のような本棚の森は、一度迷いこむと2階へ戻ってこれなくなる。図書館は、私にとって、誠に愉快で居心地の良い場所になっている。一つ残念なことは、毎回のように拒否される図書館入り口の“ゲートくん”とのかかわりである。自分ではちゃんと利用証のバーコードを乗せているつもりであるが、なぜか毎回のように司書さんの助けを借りている。彼とも早く仲良くならねばと思っている。

# 教員著作紹介

今回は『聖書』について阿部先生に自著紹介をしていただきました。

## 『聖書 聖書協会共同訳：旧約聖書続編付き 引照・注付き』

日本聖書協会発行， 2018年12月

所蔵館：本館

人間生活学科 阿部 包



学生の皆さんが使っている聖書は『聖書 新共同訳 旧約聖書続編付き』（日本聖書協会、1987年初版）だと思います。それから約30年、わたしたちが使う日本語は書き言葉も話し言葉も少なからず変化し、聖書学やその他の学問分野の研究も大きく進展しました。それを受けて、日本聖書協会は2010年に新翻訳事業を立ち上げ、全国の聖書研究者、詩人、歌人などに参加を求め、9年の歳月を費やして2018年12月初めに『聖書 聖書協会共同訳』を刊行しました。

わたしも2011年以降、旧約聖書続編の原語担当者、新約聖書の原語担当者、翻訳委員、編集委員として、多くの時間と労力を注いできました。銀座にある日本聖書協会へは、多いときで月3回、週末に出張しました。また、春と夏には翻訳作業の進捗を目的とした合宿が、軽井沢、那須、鎌倉などにある「黙想の家」で行なわれました。そのときは、毎日夕方になると近隣の温泉に連れて行ってもらい、夕食後は、新約、旧約、続編の垣根を越えて翻訳者が毎日のように交流しました。もちろん、おつまみ、ビール、ワイン付です。朝には聖堂で祈りの集いがあり、続いて朝食を皆でいただきます。それから、昼食を挟んで夕方までの約6時間、日程を5日間とすると、一回の合宿で約30時間の仕事ということになりま

す。やはり、合宿は懐かしい思い出です。

ここで、新共同訳と聖書協会共同訳との違いを少し紹介しましょう。「似姿」→「かたち」。「わたしはある。わたしはあるという者だ」→「私はいる、という者である」。「重い皮膚病」→「規定の病」。「強い酒」→「麦の酒」。「嗣業」→「相続、相続地、相続人」。「イエス・キリストを信じること、イエス・キリストへの信仰」→「イエス・キリストの真実」。「罪を償う供え物」→「贖いの座」。「いなご」→「ばった」。「コエンドロ」→「コリアンダー」。「かもしか」→「ガゼル、オリックス」。「薄荷、いのんど、茴香」→「ミント、ディル、クミン」。「メロン」→「すいか」。「柳」→「ポプラ」。「ざくろ石、サファイア、ジャスパー」→「くじゃく石、ラピスラズリ、縞めのう」などなど。

最後に、聖書翻訳の難しさに触れたいと思います。聖書協会共同訳では、ギリシア語ピステイスを「真実」と「信仰」とに訳し分ける方便が最終的に採用されたために、甚だ残念なことに、元来は同じ単語であることに読者が気づかないという不具合が生じてしまいました。

# 本を読みとくことの大切さ

## ～ポップ作りの活動を通して～

「教育原理」の授業内で「ポップ作成」について図書館職員が話をさせていただきました。受講生は「教育とは何か」という視点でポップを作成し、プレゼンテーションを行いました。ポップと本は各キャンパスの図書館で展示し、受講していない学生さんも興味を持って手に取っていました。

伊井先生、両学部の学生さんに文章を寄せていただきました。

### 人間生活学科 伊井 義人

将来、教員を目指す学生には「本」を読んでもらいたい。

でも、本を読んでもらうだけでは普通すぎる。

学生たちが教育に関する知識を受け入れるだけではなく、発信できる企画はできないだろうか。

そんな思いから、大学図書館との協力のもと、授業でのポップ制作は始まった。教員免許取得を目的とした教職課程で、最も基盤となる科目である「教育原理」を担当する教員として、授業の一環として教育本のポップ作りを始めたのは2013年度である。

つまり、7年間もこの企画を継続していることとなる。これまで、制限時間内に一人で幾つものポップを作った学生、立体型



ポップを編み出した学生、プレゼンテーションで高校時代の制服を身にまとってきた学生など、思い出は尽きない。

この授業で実感したことは、学生たちの「表現力」は授業担当者の想像を超えるということである。ポップにしても、その後の個人・グループのプレゼンテーションにしても、その成果には毎年、驚かされてきた。授業は、明確な目標とともに計画性に加えて、偶然性が大切だといわれる。このポップでの取り組みは、まさに偶然性の宝庫であった。

ここでの経験を通して、学生たちが何かを得て、そして学校教員など様々な職種に就いた時に役立っていてくれることを願っている。



### 日本語・日本文学科2年 Mさん

私が紹介した本は、『新卒教師時代を生き抜く授業術』です。この本には、新卒教師の授業の悩みと、その解決法や身に付けるべき「授業技術」などが書かれています。この本は、小学校教員向けの内容です。私は高校国語・高校書道の教員を目指していますが、参考にしたいことや、考えさせられたことが沢山ありました。また、小・中・高、どの教員も生徒たちと向き合う姿勢や熱意は同じであるということはこの本を通じて学ぶことができました。

ポップのデザインは「学校」のイメージから、黒板のデザインにし、一目見て印象に残る、インパクトのある作品にするよう心がけました。



### 人間生活学科2年 Mさん

私は『人生で大切なことはすべて家庭科で学べる』を選びました。

家庭科と、私たちの普段の生活が、こんなにも密接に関わっているのだなと気づかせてくれる内容でした。著者である家庭科教員末松さんの家庭科にまつわる実体験や、末松さん特有の面白い実験がたくさんあり、それと共に子どもたちの反応まで書かれているので、最後まで楽しく読めました。

家庭科といえば食、というイメージが強いかなと思い、五大栄養素の図を参考にポップを作成しました。実際にはいくつかの分野が含まれているのですが、内容が伝わり過ぎないようにしたかったので、シンプルで分かりやすいようなポップを作ろうと工夫しました。



# 第4回 学生選書ツアー開催

2019年6月21日、22日に紀伊國屋書店札幌本店で選書ツアーを実施しました。今年度は、両日合わせて22名の学生が参加しました。

昨年度に引き続き、学生スタッフLiStも3名運営補助スタッフとして参加しました。運営補助スタッフとして参加したLiStと参加学生2名に感想を書いていただきました。

選書した本は、一部POPを作成し、10月上旬から所蔵館で展示します。

## LiSt 中西

今回、私は6月21日に写真撮影・運営補助のためにSJ（スチューデント・ジョブ）として選書ツアーに参加しました。以前から選書ツアーに興味があったものの、都合が合わず、参加することができずにいたため、このような形で参加することができてとても嬉しく思います。選書ツアーが始まるまでは、ツアーがどのように行われているのか楽しみでありながらも不安でした。しかし、参加者の皆さんが夢中になって本を選んでいる姿を見て、私も選書ツアーを楽しむことができました。

今年は紀伊國屋書店さんで選書させていただきました。写真撮影のために私も店内を歩き回っていましたが、参加者の皆さんが興味のある本を手にとって内容を確認していたり、店内を歩き回って気になる本がないか探していたりと、とても真剣に、楽しそうに本を選んでいる様子がかがえました。すでに本を選んでいて、何冊か選んで終わる人もいれば、時間ギリギリまでどれにしようか悩むといった、それぞれ違った楽しみ方で本を選んでいる印象を受けました。

参加する前は、ゼミや講義で使うような専門的な本しか選べないと思っていました。しかし、実際はゼミや講義に関わる内容の本だけではなく、色々なジャンルの本を参加者の皆さんが選んでいて、思った以上に幅広いジャンルの本を選べるということがわかりました。本を選んでいく中で、すでに図書館に入っているという本も何冊かありましたが、自分の読みたいと思った本が図書館に入っている、図書館にどのような本があるかということを知る機会にもなったと思います。

今回はスタッフとしての参加でしたが、たくさんの本を手にとって、楽しそうに選んでいる参加者の皆さんの姿を見て、自分も興味のある本を手にとって選びたいと思いました。実際に書店に行って、自分の読みたい本を選び、その本が図書館に入るという経験はなかなかできないと思います。本が好きな人、選書ツアーが少しでも気になるという人は、ぜひ参加をして、貴重な体験してみてください！

最後に、今回参加してくださった皆さん、選書ツアーのご参加と写真撮影のご協力ありがとうございました！



# 選書ツアーに参加した学生さんから

## 文学部 文化総合学科3年 Kさん

昨年に引き続き、今年も楽しみながら選書させていただきました。毎回何を買おうか自分の中でテーマを設けながら参加しており、私自身3年生なので今回は卒論に関わるような本をということで選ばせていただきました。今年は場所が紀伊國屋書店ということもあって、売り場も広く専門書も多数取り扱っているのですが、2時間という長いようで短い時間でしたがのびのびと自分好きな本を見つけることができました。

参加するたびに思うのですが、選んだ本が図書館に所蔵されていないか検索すると多くの本が既に所蔵されていることに驚きます。この本あったのかと新しい発見につながりますし、図書館が幅広く数多くの本を取り扱っているのだなと驚くとともに嬉しく思い、図書館がさらに好きになれる良い企画だなと改めて思うことができました。

## 人間生活学部 食物栄養学科2年 Iさん

私は本を好きなように選べると知ってとてもわくわくしたので選書ツアーの参加を決めました。当日はもともと買う本が決まっていたので、十三冊ほど本を選び、とても楽しい時間を過ごせました。私が選んだ本は、ほとんど心理学系の本でした。その中で、特に面白かった上戸えりなさんの『HSPの教科書』を紹介します。

HSPとは、人より繊細な人々のことです。HSPは障がいや病気ではなく、気質です。HSPの教科書には、どのような人がHSPと言われているのか、HSPはどのような特徴を持っているのか、という内容が詳しく書かれています。HSPはあくまで気質なので、HSPだからどうということはありません。様々な気質の中の一つとしてとらえながら読んでいくと、とてもいい本だと思います。HSPではなくても、読んでいると悩みが解決したり心が楽になったりするかもしれないくらい、人の心に寄り添った本だと思います。HSPの人がこの本を読めば、きっと救われるだろうと思います。



## LiSt 活動報告 第5回

### 「私たちLibrary・Student」

LiStの中心となる仕事は「配架」です。みなさんから返却された本を元の本棚・位置に戻す作業です。この配架は、図書館にとってなくてはならない業務の1つだと思います。

その他カウンターでの貸出・返却の業務や、図書館主催行事の補助もしています。6月には、毎年恒例の「選書ツアー」が開催され、事前・事後の説明会や選書ツアー当日に職員の方の補助業務を行いました。私は当日の補助を担当し、選書された本の整理や参加者が選書している光景の写真撮影もしました。

私は今年度からLiStとして活動しています。LiStに興味を持ったきっかけが1・2年生の時に参加した選書ツアーでした。選書ツアーが円滑に進むよう補助をしていたLiStの先輩の姿が素敵で、いつかLiStになりたい！と強く思っていました。この度それが実現し充実感に満ちています。

今後の活動予定としましては、藤陽祭で図書館内を楽しみながら巡る“クイズラリー”を企画しておりますので、ぜひご参加ください。

(北16条LiSt 浮穴)



# 「令和」にことよせて 一年号と出典をめぐって

日本語・日本文学科 水口 幹記

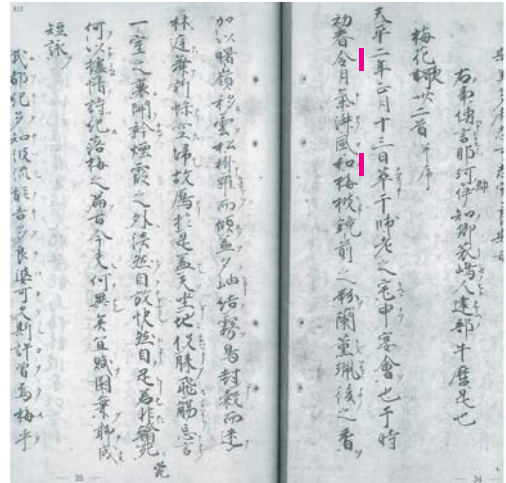
今年、年号が「平成」から「令和」へと変わった。その際、政府はその出典を国書『万葉集』だと発表した。古来、年号の出典は漢籍とすることが暗黙の了解とされ、国書が出典となることは歴史上初めのことである。ちなみに、これまでの出典ランキングは、『尚書』（書経）がトップで、次いで『周易』（易経）、『文選』、『後漢書』となっている。儒教経典、文学書、史書と幅広く参照されていたことがわかる。

さて、令和の出典となったのは、『万葉集』巻五に収載された梅花歌の序である。これは、天平二年（730）に、当時大宰帥であった大伴旅人邸で開催された宴席上で梅の花をテーマに詠まれた32首の歌群に対する序文である。そこに「于時、初春令月、気淑風和」（時に、初春の令月にして、気淑く風和）という文章があり、ここが出典だとされる（「令」は「善」の意味）。政府は国書からの出典を誇り、多くの日本人がそれをもって「日本、素晴らしい！」と謳いあげている。

しかし、発表当初からその出典に対して疑義が呈されている。そもそもの出典は漢籍ではないのか、と。序文を書いたとされているのは、宴席にも参加していた山上憶良である。彼は、漢籍に通暁しており、『万葉集』巻五に載る「沈痾自哀文」は自分の病の重さを複数の漢籍を引用しつつ嘆いた名文である。上記の文章にも漢籍の出典があるのでは？と思うのは当然であろう。そして、実はそれはすでに江戸時代から指摘されていた。僧侶であり国学者であった契沖の『万葉代匠記』には、「張衡帰田賦云、仲春令月、時和氣清」が出典であると明確に指摘されているのである。

ここにある「張衡」は中国後漢の科学者であり、政治家・文学者でもあった人物で、彼の書いた「帰田賦」は『文選』

天平二年正月十三日、萃于師老之宅、申宴會也。此序ノ發端、ハ義之カ蘭亭記ニ、永和九年歲在癸丑ニ、彼記ノ詞モ見エタリ。萃ハ孟子云。出ニ於其類。張衡歸田賦云。仲春令月時和氣清。蘭亭記云。是日之粉。宋武帝女壽陽公主人日臥含章簾下。梅花落香。未考得。加以曙嶺移雲、松掛羅勿傾蓋、而誤



巻十五に張平子（平子は字）の名で収載されている。さらに、梅花の宴自体にもモチーフがあったと言われている。宴は「曲水の宴」といわれる一種の遊戯的宴であったのだが、これは書聖と崇められる王羲之の蘭亭での宴を模したもので、序文自体も「蘭亭序」の影響を受けていたことは明らかである（他に初唐の詩の影響も濃厚）。

となると、果たして、出典を国書だけに限っていいものなのであろうか？日本は漢字を受け入れ、自らの言語としている。それを「不可避の他者」として見る論もある（子安宣邦『漢字論—不可避の他者』）。みなさんにも今一度立ち止まって考えてもらいたい。



『西本願寺本万葉集』 請求記号：911.12/Sh99/Ma48:5（本館所蔵）  
『萬葉代匠記』（契沖全集巻三） 請求記号：918.5/Ke21i/3（本館所蔵）  
『漢字論』 請求記号：811.2/Ko97（本館所蔵）

## ● 編集後記 ●

巻頭言は「図書館（室）とのかかわり」と題し、駒形先生からご寄稿いただきました。小学校教諭のご経験から、小学生と図書館（室）にかかわるエピソードを交え、児童書についてもご紹介いただきました。わくわくしながら図書室に通った、小学生の頃を懐かしく思い出し、あの頃好きだった本をもう一度読んでみたくなりました。

図書館資料Naviは「令和」にことよせて一年号と出典をめぐって」と題し、水口先生にご寄稿いただきました。「令和」の出典をめぐり、国書と漢籍の関係についてわかりやすくご説明いただいています。みなさんも普段何気なく使っている「漢字」についても、改めてその歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？教員著作紹介では、阿部先生から、翻訳に携わられた聖書協会共同訳『聖書』についてご紹介いただきました。図書館に所蔵していますので、ぜひ、手に取ってご覧ください。（K）



図書館キャラクター  
「きしんさん」

スマートフォンでは  
アプリを利用できます

藤女子大学 図書館だより 第98号 2019.10

発行者 藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西2丁目

TEL 011-736-5407 FAX 011-709-4770

<http://www.fujijoshi.ac.jp/library/>